B14-6

入院中の遷延性意識障害患者の歯科疾患調査

○安田 順一[1]、玄 景華[1]、兼松 由香里[2]、浅野 好孝[2]、篠田 淳[2]

[1]朝日大学歯学部 口腔病態医療学講座 障害者歯科学分野、
[2]木沢記念病院 中部療護センター

遷延性意識障害患者の口腔状態に関する報告は少なく実態は明らかではない。今回中部療護センターに入院している遷延性意識障害患者に対して口腔健診を行ない、実態を明らかにし、継続的な歯科医療を提供するための問題点について検討した。調査は、平成24年8月に行なった。入院患者32名（男性20名、女性12名）、平均年齢37.5歳。胃ろう24名（75.0%）、経鼻経管栄養4名（12.5%）、経口摂取4名（12.5%）であり、気管切開23名（71.9%）であった。調査項目は、DMFT指数（う蝕歯数D、欠損歯数M、処置済歯数F）、歯周炎状態、歯石付着状況、口腔乾燥状況、口腔カンジダの有無（ストマスタッド）など。

【結果】DMFT指数は、D歯数2.0、M歯数3.0、F歯数8.3であった。平成23年度歯科疾患実態調査（実調）と比較すると、年代によって違いがあるが、全体的に高い傾向がみられた。歯石付着も多く、中等度以上の歯周炎を14名（43.8%）に認めた。口腔水分度計による計測では、口腔乾燥乾燥が27名（84.4%）でみられた。口腔カンジダの陽性は5名（15.6%）、偽陽性15名（46.9%）であった。

【考察】M歯数が高値であったのは、交通事故外傷による歯牙脱落が原因と考えられた。特に20歳代のDMFT指数では、D歯数が高く、F歯数は低かった。受傷前の口腔内環境が悪かった可能性も考えられるが、未治療歯が多くみられ、歯科治療の必要性を認めた。口腔乾燥度が高い者も多くみられ、気管切開や胃ろうによって口腔への刺激が減少し、口腔機能の低下した可能性が考えられた。今後は、歯科医師・歯科衛生士による機能的口腔ケアや口腔管理を行う必要があると考えられた。